

---

# 真・恋姫†無双 ～天から来れし者～

フィリス・E・O・ナイトスター

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真・恋姫†無双 ～天から来れし者～

### 【Nコード】

N5667T

### 【作者名】

フィリス・E・O・ナイトスター

### 【あらすじ】

変態な駄神のせいで死んだ主人公が行くのは真・恋姫†無双の世界！主人公はこの世界でどうやって過ごしていくのか！

## 序章 壱（前書き）

初めまして、フィリス・E・O・ナイトスター（次回から短縮します）です。

私にとってはこの作品が処女作になります。

誤字脱字が多く、駄文になるかもしれませんが、温かい目で見てください。

## 序章 壱

「知らない天々…って見えない！真っ暗で何も見えない！」

普通こういうのって真っ白な空間とか見慣れない天井じゃないの！？

「あ、すみません。今明かりつけますね」

「うるさいのう。もう少し静かにできんのか。それとお前死んでるから」

明かりがつくとそこには羽が生えた御老人と女性がいた。…って

3

「今さらつとすごいこと言いましたよね！で、何で死んだんですか？」

「いや、下界に可愛い子がいたから風を起こしてスカートめくりをしようとしたら勢いを間違えての。」

そのせいで飛んだ看板に直撃したんじゃないよ」

「そ、そんなことで…」

「それで私が責任をとりなさいと言ってここに貴方呼んだんですよ」

「責任をとるってどうするんだ？」

「…いきなり言葉遣いが崩れたのう。せめて敬語くらい使ってほしいんじやが。一応神じゃぞ」

「敬語って敬う語って書くんだぞ。そっちの女性にならともかく、お前に使う必要無いだろ」

「まあいいわい。さっきの答えじやがお主には転生してもらっぞ」

「テンプレですね」

「しょうがないじやろ、作者に文才は1ナノも無いんじやから」

「メタだな」

「と、そんな話は置いといてじゃな。まあ行く世界はすでに決まっておる」

「何処だ？」

「真・恋姫十無双の世界じゃ」

「ああ、某笑顔の動画で見たことあるぞ。でもちろんこの先もテンプレなんだよな」

「うむ。それじゃあこのさいころを3回振ってくれ」

ええっと2、3、5か

「ということでお主の願い事を10聞こつ。きりがいいのつ」

「お、太っ腹だな」

「まあ、やるのは私ですが」

「…」  
「いつは？」

「この駄神にそんなことできるわけないじゃないですか。では、願いをどうぞ」

「じゃあ、武と知の才能を最高クラスで。それとマンガやラノベを含めた全ての武術を使え、全ての知識をください。

そして鍛えなくても衰えず、丁度いいくらいにしか見えない筋肉。身体能力を12p鬼巫女。幸運値をネギま！の椎名桜子と同じ位で」

「鬼巫女はキンクリとかは使えませんよ？」

「構いません。残りですけど転生した後も男で。容姿は気にしません。それと武器と雪村流暗記術を」

「武器の内容は後にして、雪村流暗記術とは？」

「D．．？に出てくるキャラが持っている能力で、確か、一度見聞きしたものは絶対に忘れないというものです。まあこれも某笑顔の動画で見ただけですけどね」

「そうですか。では武器の方を聞きましょう」

「えっと、

一般的な日本刀より少し長い物を二振り、色は全てが純白なものとしてが漆黒のものを。

それらに刀語に出てくる絶刀『鉋』の頑丈さと斬刀『鈍』の切れ味、

双刀『鎚』の重さを持たせてください。  
名前は白い方が『穹<sup>そら</sup>』黒い方が『溟<sup>うみ</sup>』をお願いします」

「わかりました。では残りの2つを」

「じゃあ、落ちるところは別でいいんで俺も一刀と同じ現代からのスタートで。

最後のは保留にしてください。決まったら教えます」

「わかりました。能力は転生が確認され次第与えます。  
連絡は私の名前を頭の中で呼べば1度だけ連絡が取れるようにします」

「貴女の名前は？」

「天照大神です。では、良い人生を」

そして俺の意識は闇に沈んでいった。



## 序章 壱（後書き）

序章壱が終わりました。

更新速度は遅い方だと思いますが、次回をお待ちください。

## 序章 弐（前書き）

連投しました！

誤字脱字も多く駄文だと思いますが、温かい目で見てください。

## 序章 貳

初めまして、自己妖怪をするのは初めてだね。  
俺の名前は天伎零<sup>あまのざれい</sup>だ。

いやゝ転生した手の頃は色々あったなゝ。名前が同じだったのはいいけど大変だったなゝ食事が。

まあそんな黒歴史は置いといて、そろそろ原作が始まってもいい頃だと思う。

無印の開始も今ぐらいだったと思うからね。

それと自分で頼んどいてなんだけどこの体チートすぎる！

小2で免許皆伝、今じゃ天伎流25代目当主だ。

頼んどいた刀は初代しか使えなかったとか言われてるしね。

ただ一つ気になることがあるんだよ。

確かに俺は容姿は気にしないって言ったよ？だけど男の娘にしないでいいと思うんだ。

そのせいで髪は伸ばさせられるし散々だ。

今は旋毛の所で関羽が使っている髪止めの紐が無い奴を使ってるから女に見られることも少ないけど、

髪下ろすとまんま女だぜ。

声も高い方だし、名前は女にもいるような名前だから及川に告白されたしよ。

うう、今思い出しても身の毛がよだつ。  
まあいい、今日も学校へ向かうとするか。

「お、れ〜い！」

「一刀か、おはよう」

「ちょ、ワイもいるで〜」

「朝から元気だな、及川。何かいいことでもあったのかい？」

うん、やっぱり及川みたいなやつには某アロハシャツの怪異専門家の話し方に対応するに限る。

「何もええことなんかあるかい。で、今日は何か新しい情報はあるんか？」

「ああ、今日は急遽体育で男子だけ剣道をするらしい」

「ほんとお前は何処からそんな情報を得てるんだよ」

「禁則事項だ。っとこれは未来人だったな。まあ、及川ならともかく一刀なら平気だろ。及川ならともかく一刀は体力あるしな」

「なあ、何かあることに及川ならともかくって言うのやめてくれへん？地味に傷つくわ」

「わざと言ってるわけじゃない。真実が勝手に口を衝いて出るだけだ」

「…夜道に気をつけや」

「そんな奴がいたらこいつで叩き斬るだけだ」

「っーかお前もそれさえ持つてなければモテると思うのに」

「備えあれば憂いなしと言っやつだ。」

それとバカなことを言うな、一刀。俺がそんなに持てるわけないだろってなんでお前は血の涙なんて流してるんだ？」

「零っちなんか刺されてまえばええのに」

「？」

まあ、なんやかんやで放課後になった。  
まあ授業の描写なんてつまらないだろうしな。

「一刀は部活か？」

「いや、今日は休みだ」

「んじゃ、2人で帰るか」

「おう」

「じゃあな、一刀」

「ああ、零もまたな」

そしてお互いが部屋に入った時光があふれ、光が消えた時には二人の姿は無かった。

その日大陸に2筋の光が落ちた。

## 序章 貳（後書き）

これで序章が終わりました。  
次回から原作の始まりです。  
第壱話をお待ちください。



## 第壱話 「舞い降りた先は…」 (前書き)

フィリスです。本章第壱話を更新しました。

今回sideの表記がないところは零の視点です。

また今回からあとがきで本文に出たアニメ、ラノベ、ゲーム等の説明をします。

誤字脱字が多く、駄文になるかもしれませんが、温かい目で見てください。

## 第壱話 「舞い降りた先は…」

「???? side」

皆さん、初めまして。劉弁と言います。今、私と妹の劉弁はとんでもない危機に直面しています。

「さあ、劉弁様、劉協様。大人しく捕まっていたいただきますよ」

私たちの前にいる人たちの中で、私たちに話しかけてきたのは張譲という中常侍の一人です。おそらく周りはその部下でしょう。

「張譲、なぜこのようなことをするのですか？政の実権まつりごとなら今までからあなたのものでしょう」

悔しいことに靈帝と呼ばれている父様は体が病に蝕まれていてそれをいいことに宦官たちが好き勝手やっています。その筆頭であるのがこの張譲です。

「まあ、そうなんですけどね。靈帝が病に臥せっている今、次の皇帝は劉弁様、あなただろう」

そう、そうなのです。ならばなぜこんなことをするのか意味がわかりません。

「しかしそろそろ私が皇帝になりたいのですよ。そのためにあなたを捕らえ、靈帝様の死後あなたに私の子を孕ませれば私が皇帝になることができる。」

そのための人質ですよ、劉協様はね」

な、なんてことを言うのでしょうか、この者は！

「そのようなことになれば、私は自ら命を絶ちます。そんなことは無意味ですよ！」

私は少し語勢を強めて言います。

「劉協様は人質だと言ったでしょう？その時はあなたの代わりに劉協様に私の子を孕んでもらえばいい。劉協様も死んでしまわれれば、私を皇帝にすることは容易ですしね」

「そ、そんな…」

そんなことを言われたら自決などできるはずがありません。

「まあ、妹様思いの劉弁様にはそんなことできないと思いますがね。さあ、捕えろ」

張讓の部下が私と劉協を捕まえようと近づいてきて手をのばします。

捕まりたくない！

そう思ったその時、

ドオオオオオオン！！

張讓の部下を押しつぶすように何かが落ちてきました！いったい何が！？

「な、何事だ！」

張譲もいきなりのこと慌てています。そしてもうとうと立ち込める煙の中から現れたのは

見たこともない純白に煌めく服を着た男の人でした。

side end

いつてえ〜！

何で意識持ったままなんだよ！気絶した状態じゃないのか。つかここはどこだ？って、俺誰か踏んでるし！あゝあ、気絶してるよ。

俺は急いでその場からどいて立ち上がり状況把握に努めることにした。

煙が晴れると何人かの男と、二人の女の子が向かい合っていた。つて、俺が踏んだ奴の姿、男の方にいる武装した奴と同じだ。とりあえず質問、質問

「お取り込み中だったら悪いんだがここはどこ？あんたらは誰？」

「貴様、何者だ！」

質問したのはこっちなのになぜか質問で返された。失礼な奴だ。

「あんたらに聞いても意味ないのは分かった。で、嬢ちゃんたち、ここは？そしてあんたらの名前は？」

初対面なので怖がらせないよう笑顔で言う。

「えーと、ここは洛陽です。私は劉弁と言います」

「わ、私は劉協です」

二人とも顔真つ赤にしてどうしたんだろうか？ん、劉弁に劉協？もしかしてもう霊帝崩御後？それとも俺が来たことでイレギュラーが起こったか？

「なあ、あんたたちの父親って生きてるのか？」

「え、ええ。生きてますけど…」

イレギュラーの方だったか。

「ええい、私を無視するな！こ奴を先にひっ捕えろ！」

さっきの失礼な奴がそう言うつと周りにいた奴が突っ込んできた。

だけど俺は武術の才能のおかげで氣が使える。だからこの技が使える。

「華光玉！」

そつ。某幻想が住まう土地の紅い館の居眠り門番の技だ。華嚴明星にしても良かったが範囲がでかすぎるのでこちらにした。

「な、何だ今のは！」

「お前は知らなくてもいいことだよ」

そういつて俺は背弄拳で男の後ろに回り、手刀を打ち込んで気絶させる。

「で、劉弁ちゃんに劉協ちゃん。気絶させちゃったけどこいつ誰だい？」

そう言つとふたりはさらにさらに顔を赤くし、劉協ちゃんが答えてくれた。何で赤くなつたんだろうか。

「え、えつとその人は中常侍の張讓と言つ者です」

「ふゝん」

まあ、興味ないけどね。

「…一つ質問してもいいですか？」

「別にいいぞ」

「貴方が今噂の天の御遣いの一人ですか？」

「天の御遣いつて？」

「今この大陸には『黒天を切り裂きし2筋の流星、この地に降り立ちこの地に泰平を齎す』と言われているんです」

「何でそう思つたんだい？」

まあ、あんな登場の仕方をしたら仕方ないと思うけどさ。

「見たこともない服着てますし、何より姿が人間離れしてるというか、神々しいというか…」

容姿の所為！？まあ、あの神の所為で凄いことになってるけどさあ。ん？説明されてないって？俺じゃなくて作者にいつてくれ。

代わりに説明するが、髪は銀色で長髪、普段は両端に波の模様が彫つてある金色の筒状の髪留め（R BORNの10年後の六 骸がつけているような物）で束ねてあり、

右が真紅で、左が青藍せいらんのオツダイ身長は185センチ位で体重は80キロ位の8・5頭身。そして中性的な顔立ちをしている。

そのせいで髪をほどくと美女に見えるらしい。いくらか説明済みのものもあつたのは御愛嬌だ。

まあこんな姿はそうそういないよね。

「俺が天の御遣いかは分からないな。…そういえば俺の名前を言っていないかったな。俺は天伎零だ」

「字が零ですか？それと天伎とはどう姓名に分けるのでしょうか？」

「字と言つのは持つてないな。姓が天伎、名が零だ」

「…ではもしかして真名もないんでしょうか？」

「真名つて？」

本当は知ってるがこう言わないと天の御遣いと信じてもらえないかもしれないしな。

「真名とはその者の本質を表し、本人が心を許した証として呼ぶことを許す名前のことです。本人の許可無く“真名”で呼びかけることは、

問答無用で斬られても文句は言えないほどの失礼に当たるものなんです」

「そんな名前は俺はもってないよ」

「真名が無いってことはやっぱ」「失礼します！劉弁様、劉協様、大丈夫ですか！？む、貴様何奴！」止めなさい、瑠璃！」

「しかし！」

「この人は私たちを助けてくれたのです。ほら、足元に張讓が気絶しているでしょう」

「はあ。それは分かりましたがこの者は一体……」

「この人の名は天伎零」

も、もしかして

「天の御使いです」

やっぱりかあああああああ！



第壱話 「舞い降りた先は…」 (後書き)

第壱話終了しました。

今回出てきた技はこちらです。

・華光玉… 本文で説明したとおり紅い館の居眠り門番の技。

・華厳明星… 同上

・背弄拳… 刀を集める話しに出てくる不忍の面をつけた人の技

次回の更新をお待ちください。

## 第弐話 「初めての…」（前書き）

フィリスです。第弐話を更新しました。

今回も s i d e の表記がないところは零の視点です。

誤字脱字が多く、駄文になるかもしれませんが、温かい目で見てくだ  
さい。

## 第貳話 「初めての…」

「はい？」

うん、驚いてるね。まあ無理もないか。いきなりこの人が天の御遣いだって言われても、普通は疑ったり混乱したりするよね。

「え、えつとこの者は天の御遣いなのですか？劉弁様」

「ええ、そうですよ」

「と、とりあえず貴様を不敬罪で捕らえる！」

「うわ、ちょ、止めろって！」

「止めなさい、瑠璃！」

「しかし天を名乗る不届き者は罰せねば…」

「ったく、俺は自分から天の御遣いを名乗った訳じゃねえよ。ただ俺は字や真名は持つてねえし漢の民つてわけでもないだけだ」

「それを聞いた私がこの人が天の御遣いだろうと思ったのです」

「はあ、そうですか…って忘れるところだった。劉弁様、劉協様。靈帝様がお呼びです」

「わかりました。天伎さん、ついてきてください」

「了解。あんななんて言うんだ？それと皆、呼ぶ時は零でいいぞ」

「わかりました」

「私は皇甫嵩<sup>こうぼうそう</sup>、字は義真<sup>ぎしん</sup>です。それと私はまだ貴方のことを信用したわけじゃないので。それではついてきてください」

「霊帝様、劉弁様と劉協様をお連れ致しました」

「うむ、入って来い」

「はっ」

さて、どんな顔してんのかね

「おお、弁に協。無事だったか。…む、その者は？」

「父様、この者は私たちを助けてくれた人です」

「…どこから入ってきたんじゃ？」

「え、えっと…落ちてきました」

「は？」

やっぱり霊帝さん驚いてるよ。そりゃ意味わからんな、落ちてきたとか。

「張讓の部下に捕まりそうになった時に上からズドンと…」

「そ、そうか。でそなたの名は？」

「姓は天伎、名は零だ。字と真名は持ってない」

「もしや、五胡の者か？」

靈帝がそう言うとなんかの兵が武器を構えた。

わーやばそー。まあ全然やばくないけど。

「違うな、俺はこの大陸の人間じゃない。劉弁に言わせると天の御遣いらしいぞ」

すると兵の一人が騒ぎだした。

「貴様、先程からの言葉遣いに加え、劉弁様を呼び捨てにしあまつさえ天の名を偽るとは！」

「おゝおゝ。怖いねえ」

「ふざけるな！」

「ふざけて何かいねえよ。確かに俺の国は天の国とは言われていなかった。だが、この大陸、いやこの時代の者でないことは確かだ。なら俺が天の御遣いかどうかはこの国の者が決めること。そして、天の御遣いと認められたときに他の天にへりくだってるのはおかしいだろ」

「この時代の者ではないと言ったな。どういう意味だ？」

「その前に霊帝さん、高祖劉邦の性別は？」

「女だがそれがどうした？」

「俺はいわゆる未来から来たんだよ。たとえば霊帝さんが光に包まれて、光がおさまったら目の前に男の劉邦がいたって感じた。俺は昔徐福が渡ったとされる国の未来から来たんだよ」

「にわかには信じられん話だな」

「でも考えてみる。俺はこれから起こる出来事や、未来の政治などを知ってるんだぞ。十分天の知識と言えないか？」

「まあ、それはそうだろうな」

「だけど全て当たるわけじゃないがな。俺と言う異分子がいるんだ。そのせいで俺の知る歴史と変わる可能性がある」

「そういうものか」

「そういうものだ。幾つか質問はあるが、今の大將軍は何進か？」

「そうだったが何進の奴は今回の乱で殺された」

「なら董卓は？」

「…そういえば張讓の奴が黄色い布をつけた賊から都を守護させる

と言って呼びよせておったの」

「その賊は出てき始めた所か？」

「ああ、そうだが」

「結構狂ってるな。俺が知る歴史では、黄巾の乱、さっきの賊が起こした乱だがそれが終わってから董卓が来て何進が死ぬものだった」

「確かに違っているな」

「で、あんたは俺をどう判断する？」

「確かにそなたの知識はまだ起こっておらぬことまで知っている。

…いいだろう。そなたを天の御遣いと認めよう」

「そりやどうも」

ふゝ、なんとか天の御遣いと認めさせることは成功つと。

「はっ、何が天の御遣いだ！やってしまえ！」

「趙忠！」

趙忠とか言うやつ命令で俺に9人程兵が向かってきた。そのうち趙忠と6人は周りの兵に取り押さえられたが3人が俺に向かってきた。

「よくそんな程度で向かってきたな」

俺は懷に入り込むと腹を殴り全員氣絶させた。

「父様！」

劉弁の声を聞いて靈帝の方を見ると今にも剣が振り下ろされようとしていた。

「俺に来たのは囋ってことかよ」

周りに兵はもうおらず間に合いそうにない。…俺を除いては。

「舐めるな！」

俺は隠していた穹と溟の内穹を左手に持ち、縮地で間合いを詰めその兵を居合抜きで切り裂いた。

「大丈夫ですか、父様！」

劉弁と劉協が靈帝を心配して寄ってきた。しかし、俺はその場に蹲り吐いてしまった。

「どうされたのですか！？」

「どこか怪我をされたのですか！？」

劉弁が聞いてくる。俺は劉弁たちを心配させないよう少し茶化して言った。

「俺の国では争いなんてまず無かったからさ。初めて人を殺してちよっと気分が…ね。アハハ、情けない話だよ」



そう言った後自分の意識が暗転していくのがわかった。

〔劉弁 side〕

父様が殺されてしまう！そう思ったその時零さんの姿が消えたと思ったら父様を殺そうとしていた人を見たこともない武器で斬っていました。

私と協は父様が無事なのが嬉しくて、死体も気にせず近づきました。しかし、その時零さんが吐いてしまいました。

どこか怪我をしたのか？

何か病を患っていたのか？

そんなことが私の頭の中をぐるぐる回って、ほんの少し呆然としていましたが、すぐさま何があったのか尋ねました。

「どこか怪我をされたのですか！？」

協も私と同じようなことを思ったようです。

零さんは顔をあげて答えてくれました。

その話では零さんがいた国では争い事が無く、人を初めて殺したとのことでした。

その話を聞いた時そんな国があるのだと感心すると同時に、そんな人に人殺しをさせてしまったと嘆きました。

口調こそ軽いものではしたが、その顔はひどく歪んでいました。

おそらく私たちに心配をかけぬよう無理をしたのでしょう。ですが零さん。そうやって気を使われる方が苦しいこともあるんですよ。

そう言った後、零さんは糸が切れたかのようにたおれてしまいました。

side end

「知らない天井だ…」

俺は何でこんなところで…ってそうだ、俺は人を殺したんだった。

「ハハ、もう胃が空っぽで胃液すら出てこないや」

樂觀視してたなあ、こんなことになるなんて。

「ちょっと外の空気でも吸うか」

そして零は城壁の上へと向かった。

「今日は満月か…」

新月じゃなくて良かった。そんなんだったら俺はもっと落ち込んだ。

「零さん？」

「ん？ああ、劉弁と劉協か」

「その、体調は大丈夫ですか？」

「うーん、あまりいいとは言えないな。心配してくれてありがとな、劉協」

「い、いえ」

「零さん、今日は父様を助けていただきありがとうございました」

「お礼なんていいよ、自分の為にやったことだから」

そう、全ては自分のためなのだ。昔からそうだった。一刀は昔からモテてたからいじめられてたことがあった。

一刀は数人なら大丈夫だったけど大人数で来ると太刀打ちできなかった。俺は大切な友達が傷つくのを見るのが嫌で、いつも一刀に知られないように喧嘩してた。

「そう…だったな…」

「え？」

「そうだよ、俺は一番大事なことを忘れてたんだ…」

俺は最初から自分が怯えて誰かが傷つくくらいなら、自分が傷つくことを選ぶ、そう決めてたんだ。

自己満足だ？そのの何が悪い。結局俺は我儘なんだ。俺は自分が殺した奴の命の重さなんて重すぎて背負えない。

だから俺は死んだ奴が清々しすぎて怨めないほどにまで自分らしく

生きること決めた！

「よし、元気出た！」

「い、いきなりどうしたんですか？」

「いや、ただ俺なりの覚悟を決めたっただけだ」

「そ、そうですか。心配したんですよ」

「悪いな、けどもう大丈夫だ！」

今の俺は、ちゃんと笑えていると思うから。

翌日、俺は霊帝たちと一緒に洛陽の民の前に出ていた。

「昨日、城で謀反が起こった！」  
ザワザワザワ

やっぱり騒ぎ立てる奴がいるか。

「しかし朕の下に天の御使いが舞い降りこれを沈めたのだ！」

さらに騒ぎが大きくなったな。さて俺の出番か。

「洛陽の皆、俺が天の御遣い、天伎零だ！」

俺が着ているのは聖フランチェスカの制服。協はよく晴れてるから

きつと光り輝いて見えるだろう。

「俺はここを治めに来たわけではない、平和を齎しに来たんだ！」

俺がここの皇帝になることで平和にしたんじゃ意味がないのだ。

「俺は漢の民ではない。故にここを治めるのは漢の民である今まで通り霊帝たちになるだろう。」

そして俺は霊帝たちと共にこの地に平和を齎すと誓おう！」

俺は言葉に気を乗せている。言霊とまではいかないまでも威厳があるようには聞こえるだろう。

「まず初めに、ここ洛陽で悪政を行っていた宦官の処分を以て示そうと思う！」

これは自分から言い出したことだ。天の御遣いが悪を裁いた。それだけで今大陸に広がってる天の御使いの噂の信憑性は上がり、共に歩むと言った霊帝たち、延いては漢王朝の評判も上げる作戦だ。皆からは昨日のこともあり反対された。だけでももう大丈夫だと無理やりこの案を押し通した。

「今まで行ってきた悪行の報いを受けよ！」

そうして宦官たちの首から鮮血が飛び、洛陽は歓喜に包まれた。

## 第貳話 「初めての…」（後書き）

第貳話終了しました。

今回出てきた技はこちらです。

・縮地…子供先生の出てくる話にある氣を用いた移動術

次回の更新をお待ちください。

第参話 「一方その頃…」 (前書き)

フィリスです。第参話を更新しました。

今回は一刀君の視点です。

誤字脱字が多く、駄文になるかもしれませんが、温かい目で見てください。

## 第参話 「一方その頃……」

「……流れ星？それも2筋も。不吉ね……」

「……様、出立の準備が整いました。……どうかしましたか？」

「流れ星が2筋見えたのよ」

「こんな昼間に……ですか？」

「吉兆とは思えませんね。出立を伸ばしますか？」

「……いえ、予定通り出立するわ」

「承知いたしました」

- - - - -

「……痛つて」

突然目の前が光ったと思ったら、今度は一体何なんだ？

確か零と別れてそれから……

「名前は……わかる。部活も、友達のことも。分からないのはこうなった前後のことか」

ああ、暗いと思ったら目を瞑ってたのか。って



「なんじゃこりゃーーーーー!」

目を開けると広がっていたのは一面の荒野だった。こんなところ日本にあったのか?

「こ、ここはどこだ?」

少なくとも日本ではないと思うけど、一番近いのは……砂漠かな。

「おう兄ちゃん、珍しい服着てんじゃねえか」

人だ!と思って、声がした方を向いたら、変な格好をした3人組がいた。

「……コスプレ?」

顔は東洋系だけど、こんな服装日本じゃ見ないぞ。

「意味分かんないこと言ってるじゃねえぞ、お前」

「あの、すみません。ここはどこですか?」

「はあ?」

「それと携帯持ってませんか?バッテリー切れちゃって」

「こいつ、頭おかしいんじゃないっすか?」

「俺もそう思った」

日本語が通じてるってことはここは日本だよな。

「ここ日本ですよね」

「にほんって何だ？そんなことより兄ちゃん、金出せや」

「は？」

この人が持つてるのって剣か？それも真剣。

「言葉は通じてるんだろ？だったら金出せや。それとその服も置いてってもらおうか」

「ええっと、これだけしかないですけど……」

そう言って俺はポケットに入ってた小銭を出す。

「なんだこりゃ。舐めてんじゃねえぞ！」

ドゴッ！

「ぐう！」

蹴られたせいで2転、3転と転がる。

「ふざけたことばかり言ってるよと殺しちゃまうぞ！」

「待てい！」

「だ、誰だ！」

「たった1人に3人がかりで襲いかかるなど言語道断！  
そんな者どもに名乗る名などない！」

その声が聞こえた次の瞬間、三人のうち一人が吹っ飛んでいた。

「て、てめえら、逃げるぞ！」

「逃がすか！」

助けてくれたのはいいけど、追って行っちゃったよ。

「大丈夫ですか？」

次に話しかけてきたのはなんだかのんびりとした雰囲気の子だった。

「傷は……大したことはなさそうだな」

もう1人のしっかりしてそうな子が立たせてくれる。

「風、包帯は？」

「もう無いですよ。この前稟ちゃんが使っちゃったじゃないですか」

「……そうだったわけ？」

「いや、大丈夫だから」

そう言ってから、頭から血が出ているのに気がついた。

「ならいいんですけど」

「やれやれ、逃げられてしまった」

「馬でも使われたんですか？」

「うむ、さすがに馬には勝てんかったよ」

「まあ、追ひ払えただけで十分ですよ」

「災難でしたね。この辺りは比較的賊は少ないのですが……」

比較的ってことは他の所でも出るのか？

「あの、風さん？」

「ひへっ！？」

「貴様！」

そう言った瞬間さっきの子の槍の穂先が俺の目の前にあった。

「な、何だ！？」

「貴様、いきなり人の真名を言うとはどういっつ見だ！」

「て、訂正してください！」

「は、へ、え？」

「訂正しなさい！」

「わ、わかった。訂正する、訂正するから！」

「……結構」

「い、いきなり真名で呼ぶなんて、びっくりしちゃいましたよ」

「こちらの台詞だと思っただけ……」

「ま、真名……ねえ。じゃあ、なんて呼べばいいだ？」

「とりあえず真名はやばいってことは分かった。どんな初見殺しだよ……」

「はい、程立と呼んでください」

「いまは戯志才と名乗っています」

「今の絶対偽名だろ……って程立に戯志才？」

「もしかしてここって中国？」

「星ちゃん、この辺にそんな地名ありましたっけ？」

「いや、聞いたことがないな。お主、どこかの貴族とお見受けするが、どこの出身だ？」

「えっと、日本の東京だけど……」

「にほんのとうきょう？稟、そんな地名あったか？」

「無いわね、南方の国かもしれないけど」

「はあ？」

日本を知らないって、あり得るのか？

「まあ、後のことは陳留の刺史殿に任せるとしよつか」

「そうですね」

「しし？」

「ほら、向こうに曹の旗が」

戲志才の指した方を見ると砂煙が見えた。

「って、三人とも俺を置いてくのか？」

「我々のような者が貴族の御子息を連れていると、よからぬ想像をさせてしまうのですよ」

「俺は貴族なんかじゃないって」

「その辺りは自分で説明しなされ」

「え、ちょー！」

「それでは！」

「ではでは」

そして三人はあつという間に俺の前から姿を消して、俺はたくさんの騎馬に囲まれた。

「華琳様、こ奴は……」

「違うようね。もっと中年の男だと聞いたもの」

「どうでしょうか」

「逃げる様子がないということは、関係無いのだろうけど……」

「きっと、我々におびえているのでしょう。そうに決まっています」

「……私には面食らっているように見えるのだけど」

誰かを探しているのか？全く話が見えない。

「あの……」

「何かしら？」

さっきのはたぶん真名だよな。

「君、誰？」

「それはこちらの台詞よ。名を尋ねるときは自分から名乗りなさい」

「俺は北郷一刀。日本人だ」

「……はあ？」

「それより、此処はどこなんだ？」

「貴様、さつさと生国を言わんか！」

「いや、だから日本だって言っただろ！」

「姉者、そう威圧しては答えられんと思うぞ」

「しかしこ奴が賊の一味かも知れんのだぞ！」

「春蘭、貴女にはこの者が殺気も感じさせないほどの手練に見えるの？」

殺気とか手練とかそういうことは零にいつて欲しい。

「それは……まあそうですが……」

「北郷だったかしら？」

「あ、ああ」

「ここは陳留、そして私はそこで刺史をしている者」

「しっ……」



「刺史も知らないの？」

「ああ」

おかしいな。ニュアンス的にはここは漢字を使ってるだろうし、中国も日本も知らないなんて。「呆れた。秋蘭」

「刺史と言っるのは街で政をして、治安維持、不審者などの捕縛及び処罰をする務めのことだ。わかるか？」

「まあ。要は警察と役所を足して2で割ったようなものか」

「また意味のわからんことを……」

「要するに、税金を取ったり、法律を決めたり、街の治安を守る仕事なんだろう？」

「わかってるじゃない。なら今の貴方の立場も分かるわよね？」

「税はともかく、治安はみ出してないんだけど……」

そもそも街の場所が分からないからな。

「少なくとも、十分以上に怪しいわよ。引っ立てなさい」

「はっ」

「半数は残ってこの辺りを搜索、残りは一時帰還するわよ」

「はっ！」

- - - - -

「…もう一度聞く。名前は？」

「北郷一刀」

「…生国は？」

「日本の東京」

「…どうやってここまで来た」

「ここに来る前後の記憶が無いから分からない。気がついたらあそこ にいたんだ」

「…華琳様」

「埒が明かないわね。春蘭！」

「はっ、拷問でもしましょうか！」

「…拷問されても知らないものは知らないって」  
「後はこ奴のもちものですが……」

「この菊の彫刻は見事ね、貴方が彫ったのかしら？」

「いや、ただのお金なんだけど……」

「お金？その割には見たことない種類だけれど、その日本と言うのはどこにあるの？」

「まずこの国の名前がわからないと無理だよ」

中国じゃないならここはどこなんだ？街並みは明らかに中国なんだけど……

「そう言えば君たちの名前はなんて言うんだ？いつまでも君っていうのも何だし、さっきから呼んでるのは真名っていうやつなんだろ？」

「他の国から来たっていうのに真名のことは知ってるのね」

「さっき言った助けてくれた人に聞いたんだよ。君たちのも俺が呼んじゃ駄目なんだろ？」

「当たり前だ！」

「だから……さ」

「そう言えばそうね。私の名前は曹孟徳、この2人は夏侯惇と夏侯淵よ」

「は？」

「聞こえなかった？」

「いや、聞こえたけどちょっと信じられなくて」

この子たちがあの……だろ？

「それ、通称とか別名とかじゃないよね？」

「何！貴様、私が父母から頂いた大切な名前を愚弄するつもりか？」

「いやいや、違うつて。それって親が三国志を好きだったから名付けられたってわけじゃないんだよな？」

「三国志……とはなんだ？」

いや、三国志って中国の一大古典だろ？その名前を使ってるのに知らないって。いや……まさか。でもそれだと辻褄が合うしなあ。

「なあ、もしかして今の皇帝って靈帝か？」

「ええ、そうだけれど……」

「なら、マジで君が魏の曹孟徳かよ……」

「あなた、なぜそれを知っているの？まだ誰も言っていないのだけれど？ちゃんと全て説明しなさい！」

「わかった、今の自分のことも分かったから説明するよ」

- - - - -

「……で、結局それはどういうことなのだ？」

「だから俺は未来から来たって言ってるんだよ」

「秋蘭は理解できた？」

「まあ、大体は」

「まあ、簡単にいえば、君たちが気づいたら知らない土地にいて、項羽や劉邦に会ったみたいなものだ。そんなあり得ないことが起こってるんだよ」

「……たしかにそれなら魏という名前を知っていてもおかしくはないわね」

「つまり……どういふことなのだ？」

「わかっているのは今ここに北郷一刀と言う人物がいるのは確かと言っただけだということだ、姉者」

「う、うむ？」

「これでわからないならあきらめろ、姉者」

「むむむ……」

「春蘭。色々言っただけどこの北郷一刀は天の国から来た遣いの一人なのだそうよ」

「はあ？」

「なんと！このような男が……ですか？」

「なあ、天の御遣いっていうのは何なんだ？」

「今、噂になってるのよ。『黒天を切り裂きし2筋の流星、この地に降り立ちこの地に泰平を齎す』っていうのがね。」

これからあなたは天の御遣いと名乗りなさい。それとも槍で突き殺されたいかしら？」

「て、天の御遣いでいい」

「さて、疑問が解決したところで現実的な話に入っていいいか？」

「ええつと南華老仙の古書を盗んだ賊についてだったっけ？」

それを追って荒野を走ってたんだよな。

「そうよ、貴方は顔を見たのよね？」

「ああ。名前は分からないけど、ひげとチビとデブの3人組だった」

「情報とは一致してるわね。会えばわかるかしら？」

「ああ、わかると思う」

「そう、なら私たちに協力しなさい」

「わかった」

「随分と素直なのね」

「今できることと言えばそれくらいしかないからな」

このままじゃ餓死するだけだろうし。

「そうでもないわよ？貴方の未来の知識は役に立つだろうし」

「わかった、世話になるよ」

「なら、部屋を準備させるわ。好きに使うといいわ」

「ありがとう、助かるよ」

「そういえば一刀の真名を聞いていなかったわね。教えてくれるかしら」

「えっと、俺は真名なんて持ってないんだけど」

「ん、どういうことだ？」

「俺のいた国には真名なんて無かったんだよ。強いて言えば一刀が真名に当たるのかな」

「あなた、会っていきなり真名を呼ばせることを許していたというの？」

「まあ、そっちの流派に合わせるのならそうなるのかな？」

「そう、ならこちらにも真名を預けないと失礼でしょうね」

「は？」

「一刀、私のことは華琳と呼んでいいわ」

「いいのか？」

「ええ。貴女達もいいわね？」

「夏侯惇はいいのか？」

「なぜ私に聞く！」

「頸、刎ね飛ばさない？」

「当たり前だ！」

「じゃあ、今曹操の真名を呼んだら？」

「それはもちろん頸を……いや蹴るだけにしてやる」

「蹴られるのかよ……」

「止めなさい、春蘭。秋蘭もいいわね？」

「ええ」

「秋蘭、お前まで……」

「私は華琳様の言うことに従っただけだ。姉者は違うのか？」



「それはそうだが……そうだこいつの真名が本当かどうかわからぬではないか！」

「そんなことをした方が刎ねられるだろ……」

「あら、よくわかってるわね」

「……まあな」

「結構。ならこれからは華琳と呼びなさい。春蘭も秋蘭もいいわね？」

「ええ」

「は、はい」

「それじゃあ、これからよろしくな、華琳」

そうして俺は曹操の所でお世話になることになった。

第参話 「一方その頃…」 (後書き)

第参話終了しました。

今回出てきた技はありません。

次回の更新をお待ちください。

## 第肆話 「作戦開始」(前書き)

遅くなりました、フィリスです。第肆話を更新しました。

誤字脱字が多く、駄文になるかもしれませんが、温かい目で見てください

## 第肆話 「作戦開始」

〽零 side〽

俺が宦官を処刑した2日後、ある知らせが入った。

「董卓殿、ご到着されました！」

「うむ、わかった。謁見の間に呼べ。零殿、おぬしは朕について来てくれ」

「わかったよ、宏さん」

俺は2日前に宏さんと呼ぶことを許された。

謁見の間に着くまでそのことを話そうと思う。

〽回想〽

「お主の作戦はうまくいったようだな」

「ああ、成功して良かったよ」

「それで平気なのですか？」

「ん、何が？……ってああ、処刑したことなら平気だよ。言っただろ？覚悟を決めたって。だから大丈夫だよ、劉弁」

「ところで、天伎殿……」

「劉弁たちにはもう言ったけど、俺のことは零でいいぜ。真名は無いがこれが両親からもらった唯一の名前だからな。真名の代わりに受け取ってくれ」

「ふむ、朕も真名を預けたいところだが、皇帝の血筋の者は伴侶にしか真名を教えるてはならぬというしきたりがあってな。教えられんだ。」

故に朕のことは名の宏と呼べ」

「ん、わかったよ、宏さん」

「『さん』はつけんでもいい」

「あんたの方が年上だからいいんだよ。あんたも俺を呼ぶ時『殿』をつけるしな」

「ふむ、わかったぞ」

「あ、あの私は弁と呼んでください」

「私も協でいいです」

「先程のことから貴方のことは信用できるとわかったので、真名を預けます。私の真名は瑠璃と言います。どうぞ、受け取ってください」

「瑠璃は堅いな。私は朱雫、字は公偉。真名は珊瑚だよ。よろしくね、零さん！」

「ああ。皆、改めてよろしく、弁、協、瑠璃、珊瑚」

心配をかけてはいけないので、ちゃんと笑えることを示すために微笑む。

「……（ぼふん）……」

ん、皆なんか赤くなってる。なんか怒らせるようなことしたかな？  
ってなんか皆で内緒話し始めた。

「いつもの顔は凜々しいって感じだけど差が激しすぎるよ」

「ええ、あれは反則だと思います」

「お、お姉ちゃん」

「何も言わなくてもいいわよ、協。私も同じだから」

「皆、何話してんだ？」

「な、何にもないよ！」

「ふん。まあ、いいか」

「それで零殿。今度董卓が来たときにお主にも官位を与えようと思うのだ」

「へえ。どのくらいにするんだ？」

「うむ、皇帝と同じ位の官位を作ろうと思ってな。名はまだ決まっ

ておらぬがそれだけは伝えておくぞ」

「了解」

〈回想　e n d〉

「董卓殿をお連れ致しました」

俺たちがついた少し後に、董卓が連れられてやってきた。

「失礼いたします」

「うむ、よく来てくれた」

董卓には悪いが、原作を変えるのは反董卓連合の時にする。そのために宦官が進めていたように董卓を相国にする。

「靈帝様、失礼ですがそちらの方は？」

董卓と一緒に入ってきた賈馱が俺のことを尋ねる。

「この者は天の御使いの天伎零殿だ。真名は無いらしいのだが、零がこちらでの真名に当たる故気をつけるように。」

それで、このたび呼んだのはそなたを相国に任命するためだ」

「……私たちは大した功績も上げていませんいけません。なぜでしょうか？」

「本来は張讓が洛陽の守護の為に呼んだのだが、先日悪政を行っていた宦官を零殿が処罰したときに張讓が入っていてな。」

しかし、政治に携わる人数が足りなくなったのだが、調べるとそなたは善政をしていると評判らしいのでな。  
ならばと相国につけようとなったのだ」

「……わかりました。ありがたく拝命致します」

「おお、そうか！ありがたい。後で、案内させる。しばし待て」

「「はっ！」」

「それと零殿、お主を『双天將軍』とすることになった」

「天と双<sup>なら</sup>ぶ將軍つてことか。悪くない。  
分かったよ、宏さん」

「うむ、それは良かった」

「ちょっと、あんた！靈帝様に何て言葉使いを！」

「む、そなたは？」

「私の名は賈<sup>く</sup>駟、字を文和と申します」

「ふむ、賈駟よ。この者は朕が認めているからよいのだ」

「はっ、失礼しました！」

「よい。零殿も良いな？」

「ああ。それと宏さん、俺は少ししたら一人で漢全土を巡ってみよ



うと思う」

「む、なぜだ？」

「一応、孫子とかの軍略が書かれた書は暗記してるからな。本格化する前に、人材を集めるためにもと思つてな。5日分ぐらいでいいから、食料を提供してもらえると助かるんだが」

「うむ、わかった。明日には準備をさせておこう。ついでに馬も頼んでおこう。手がつけれないようなのが1頭いるらしくてな。まあ、零殿なら大丈夫だろう」

「ありがとう、助かるよ。おそらく今から起こる乱の最終決戦場所は冀州だ。そこで瑠璃や珊瑚と落ち合うことにするよ」

最終決戦までに廻りたいのは、原作にいなかった青州東萊郡の太史慈、冀州河間郡の張？、涼州天水郡の姜維、司隸州河内郡の司馬懿、生まれた豫州潁川郡か水鏡塾のある荊州襄陽郡の徐庶の五人の所。

予定としては天水 襄陽 潁川 河内 河間 東萊の順だ。  
会う前に途中の村などを助けられれば僥倖だ。

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

旅に出て1週間と3日ほど経ち、俺は天水に入っていた。  
途中いくつもの街に立ち寄り、賊の被害があれば倒して、名を広めていった。

「いや、それにしてもこの馬は凄いな。普通の馬だともう少しかかるって聞いてたんだけど」

俺が旅に出る日に貰ったのは漆黒の毛並みを持つ馬だった。大きさは普通の馬と変わらないのだが、  
速さは汗血馬に勝るとも劣らないものだった。俺はこの馬に『虚影<sup>こえい</sup>』という名をつけた。

「お、街が見えてきた。よし、急げ虚影」

そうしてしばらく駆けて街に着いたが、その街並みはボロボロだった。

「この様子だと賊に襲われたところってどこか」

街の人を探しているといきなり槍を突き付けられた。

「ん、いきなりどうした、嬢ちゃん」

「お前何者だ！賊か？」

「賊だったらもう襲ってると思うんだけどな。まあ、賊ではないよ」

「ならここに何しに来た！」

「俺は今大陸中を歩きながら人を探していてな。ここにはその通り道で来ただけだ」

「……誰を探してるんだ？」

「5人程いるんだが、ここら辺では姜維という奴を探していてな」

「姜維って言うのは俺のことだけど、何で探してたんだ？」

ふうん、いわゆる俺っ娘ってやつか。別に、なんとも思わないけど。

「お前は洛陽に現れた天の御遣いについて知っているか？」

ん？天の御使いの名を出した瞬間目が輝き始めたぞ？

「ああ！すっごいよな～！いきなり現れてその次の日には悪い事を  
してた宦官を処刑してさ！今は何か旅してるって聞いたけど……」

「お、おお。凄い反応だな。で、俺がその天の御使いだ」

「ええ～、全然そんな風には見えないけど……そんなこと言うなら  
証拠を見せてみるよ」

「ん～じゃあほれ。武器を見せてやるよ」

そう言っただけ俺は涙を地面に突き刺す。

「うわ、噂に聞いてたのと一緒にだ！本当に本物だったのか～。なあ、  
持ってみてもいいか？」

「持てるもんならな」

無理だと思っただけ。すんごく重いし。

「何だよそれ～って重っ！」

「やっぱり無理だったか」

「よくこんなの振れるな。あ、返すよ。で、何で俺を？」

「ああ、そうだったな。さっきお前の言った通り悪い宦官を処罰したんだがその所為で人が足りなくなてな。

俺の仲間になつてくれる奴を探していたんだ。それでお前の事を探していたんだ」

「何で俺なんだ？俺は別に有名なんかじゃないのに」

「詳しくは今は言えないが、お前はちゃんと鍛えれば強くなるって知ってたからかな」

「知ってた？」

「ああ。詳しくは言えないけど、天の知識だと思ってくれればいい。他には襄陽、潁川、河内、河間、東萊に行くつもりだが、どうだ？一緒に来る気はないか？」

「行きたいって気持ちもあるんだけど、賊がいつ来るかわからないし……」

「それなら俺が手伝ってやるよ。徹底的に叩き潰して、この辺りから一掃してやる。だから一緒に来てくれないか？」

「しょうがないなあ。うん、いいよ。俺はあんたについて行く」

「本当か！？ならこれからよろしくな、姜維。俺のことは零でいい

ぞ。俺には真名がないからな。そう呼んでくれ」

「わかった。私の真名は<sup>れいりん</sup>霊麟だ。これからよろしくな、零兄」

「れ、零兄？」

「ああ、駄目か？」

「うーん、ま、いつか。よろしくな、<sup>れいりん</sup>霊麟」

それにしても分かりやすい真名だな。姜維は天水の麒麟児と呼ばれていたらしいし、麒麟は四<sup>すい</sup>霊に含まれる瑞<sup>ずい</sup>獣だ。だから<sup>れいりん</sup>霊麟ってわけか。

- - - - -

「零兄、西方から賊が来た！数はおよそ5千だよ！」

「了解。確か戦力になるのは2千程だったな」

俺は<sup>れいりん</sup>霊麟を仲間にした後、街の人を1か所に集め自分が天の御使いであることを伝えた。

<sup>れいりん</sup>霊麟によるとこの町の太守は逃げだしたらしく、次来たらお終いだともいうような顔だったのだが、

それを伝え一緒に戦うということを告げると、どうやら希望が見えてきたようで少しずつ活気が戻っていった。

それから今日賊が来るまでの5日間だけがしつかりと鍛錬をし、<sup>れいりん</sup>霊麟には少しばかり軍略を教えていた。

「俺がまず突っ込むから霊麟は頃合いを見計らって突撃をしかけてくれ」

「零兄は大丈夫なのか？」

「ああ、心配してくれてありがとな」

そう言っただけ俺は霊麟の頭を撫でてやる。恥ずかしいのか顔がいつも真っ赤になるが、なぜか撫でたくなるのだからしょうがない。

「そ、それでどうなんだよ。大丈夫なのか？」

「ああ、大丈夫だよ。任せておけって」

side end

side  
賊頭

「頭、前は残念だったすね」

「まったく全くだよ。あの女のせいで全然奪えなかったからな。だが今回は大丈夫だろうよ。前回よりも多く連れて来てんだ」

「そっすね」

「頭！」

「ん、どうした？」

「何か村の前に変な男がいるんだな」

「ああ？何だよひとりじゃねえか。関係ねえ、殺っちまえ」

あの村には美人が多いって話だからなあ。今から楽しみだ。

｝side end｝

｝零 side｝

俺は今、戦闘用の服に着替えて街の外に立っている。いつも着ているフランチエスカの制服が汚れるとまずいので、途中に寄った街で仕立ててもらった。制服とは反対に、黒を基調とし、白色の線が入っているものだ。

「止まれ、賊どもよ！」

「何だてめえは！」

この口調はあんまし得意じゃないし恥ずかしいんだがしょうが無いのか。

「我こそは天の御遣いなり！このまま立ち去り忒度と街を襲わないのならよし！立ち去らぬのなら相応の報いが待っているだろう！」

「生意気いつてんじゃねえぞ！一人で何がきんだ！どうせ噂も嘘なんだろう。野郎ども殺っちまえ！」

やっぱりこんなんじゃ止まらないよな。

「我、天伎零！天の御使いの名の下に貴様らを断罪する！」

さて、やるとしますか。

「参る！」

そう短く告げて俺は左腰に佩いている穹に氣を込める。

「零閃、昇華。秘剣、百鬼夜行！」

抜刀と共に飛んでいくいくつもの斬撃が賊を襲い、隙間を開ける。  
俺は縮地でその隙間に入り、  
零閃で10人程斬り殺す。刀身に血が付き準備が完了する。

「斬刀狩り！」

光速を超える居合により1人、また1人と敵が死んでゆく。

「皆、行くよ！」

そう靈麟の声が聞こえたと思うと、大きく関の声を上げながら街の人たちが突撃してきた。

そうして戦場は乱戦状態になった。

「お前ら、なに手こずってやがる！」

偉そうに指示を出している男の姿が見えた。……あいつが頭か。

「斬空閃！」



俺は斬撃を飛ばしその男の首を切り裂く。

「か、頭あ！」

やっぱりあいつが頭だったか。

「貴様らの犯した罪の報いを受けよ！」

そう言い放ち、今度は動きながら斬刀狩りを繰り返していく。

数十分後、戦場だった場所にはいくつもの賊の死体が転がっていた。

「賊は皆死した！勝ち鬨を上げる！」

すると至る所から声上がる。

「零兄、大丈夫だった？」

「ああ、大事ない。そっちも大丈夫みたいだな」

「うん！」

「さて、街に戻るぞ」

- - - - -

街に戻った後、街の人からたくさんの感謝をもらった。今は明日街を出ていく準備をしているところだ。

「靈麟、準備はできたか？」

「一応できてる。でもさすがに馬までは準備できなかったよ」

「それはしょうがないんじゃないか？まあ、馬が手に入るまでは俺の馬に乗せてやるよ。靈麟は小柄だし一緒に乗れるだろ」

「は、はあ！？何言ってるんだよ、そんなの恥ずかしいだろ！」

「そう思っならなるべく早くお前の馬を手に入れる」

「うゝ」

「そういじけんなって。金は俺が出してやるから。さて、俺はもう寝るがお前は？」

「俺ももう準備は終わったし、寝ることにする。じゃあ、明日な」

「おう」

そう言って別れた後、零はすぐに寝始めた。その数時間後、俺と靈麟は街の外にいた。もちろん見送りの人も大勢いるが。

「御遣い様、この度は誠にありがとうございました」

「当然のことをしたまでだ。俺は漢王朝と共にこの乱世を鎮めようとしているんだからな」

「姜維！御遣い様に迷惑かけんじゃねえぞー！」

「うるさい！」

「それじゃあ、そろそろ行くか。霊麟、早く乗れ」

先に霊麟を虚影に乗せ、その後ろに俺が飛び乗る。

「襄陽は……おそらくこっちだろう。虚影、頼む」

虚影は一啼きしてゆつくりと駆けだす。さて、徐庶はいるんだろうか。

- - - - -

天水を出て、1か月程で襄陽へとたどり着いた。

「さて、水鏡塾の場所も聞けたし後は今日泊まる宿か」

証人の一人に聞いたところ、水鏡塾は山の中腹辺りにあるらしい。

「さてこの宿は空いてるかな？先に聞いてくるから厩に繋いどいてくれ、霊麟」

「わかった」

部屋が空いてるといいんだけどな。

「おっちゃん、空いてる部屋はある？」

「ん、兄ちゃん1人かい？」

「いや、連れが1人いる」

「そりゃ困ったな。1人用の部屋が1部屋しか空いてないんだよ」

「しょうがないか、他の宿」それは無理だと思うぞ「何でだ？」

「さっきからうちに来てる客は他が空いてないから来たって言うてたからな」

「マジか。困ったな」

「零兄、どうしたんだ？」

「霊麟か。いや、1人用の部屋が1部屋しか空いてないらしいんだよ。他の宿もあいてないらしいしな」

「で、兄ちゃん。どうすんだ？」

「しょうがないか。おっちゃん、いくらだ？」

「この部屋だと……このくらいだ」

「んじゃ、はい」

「おう。ゆっくりしていつてくれ」

「行くぞ、霊麟……って顔真っ赤にして固まっちゃってるよ」

俺は溜息を吐くと横抱きにして部屋まで運んだ。

「おゝい、着いたぞ」

「へ？って、いつのまに！？」

「お前が固まつてる間にだ。寝台はお前が使つていいぞ」

「じゃあ零兄はどうすんだよ」

「俺はそこらへんの床に座り込んで寝るとするよ」

「でもそれじゃあ零兄に悪いだろ」

「いいんだよ、お前がゆっくり使え」

「で、でも……」

「いいからいいから。じゃあお休み」

そう言つて俺は壁に寄り掛かつて、穹と凵を抱きながら寝始める。

「あ……りが……」

そう呟かれた靈麟の言葉は意識が混濁し始めた零には届かなかった。

side end

## 第肆話 「作戦開始」 (後書き)

第肆話終了しました。

今回出てきた技はこちらです。

- ・零閃：刀を集める話に出てくる抜刀術。
- ・百鬼夜行：この小説オリジナルの技。零閃の技術を昇華させ、氣を刀身に寄せ、何度も居合を行い斬撃を飛ばす。

- ・斬刀狩り：刀を集める話に出てくる技。刀身を血で濡らし、鞘との摩擦係数を減らして光速を超える居合を繰り返し出す。

- ・斬空閃：子供先生がいる話などに出てくる技。氣を刀身に寄せ、遠距離にある物体を破壊する。

次回の更新をお待ちください。

## 第伍話 「仲間集め」(前書き)

遅くなりました、フィリスです。第伍話を更新しました。

こないだ友人に「宦官って、アレ切り落とされてなかったっけ？」と聞かれ、そう言えばそうだったなと思いました。とりあえず、賄賂を贈って見逃してもらったと思ってください。

誤字脱字が多く、駄文になるかもしれませんが、温かい目で見てください。

## 第五話 「仲間集め」

〽零 side〽

朝飯を適当に済ませて、今は水鏡さんと話始めたところだ。

「で、天伎殿。用とは一体何ですかな？」

「俺は今共に戦う仲間を探してます。ここには優秀な子が多いと聞いたんで仲間になってくれる子はいないものかと訪ねたんですよ」

「そうですか。で、誰を呼べばよろしいのです？」

「徐元直殿をお願いします」

「わかりました。少しお待ちを」

- - - - -

「天伎殿、お連れしましたよ」

「ありがとうございます。初めまして、元直殿。俺は天の御遣い兼双天將軍の天伎零だ。よろしくな」

「は、はい！ わ、私は徐元直と言います！」

「そんなに固くならなくていいよ」



「は、はい！」

「では天仗殿。失礼ですがなぜ元直を仲間にと呼んだのでしょうか？  
有名さで言えば他にもいるはずでしょう？」

「それは私も聞きたいです。私なんかより朱……孔明ちゃんや鳳  
統ちゃんの方が頭良いし……」

「そんなに自分を悪く言うな。それと理由だったな。簡単に言えば、  
殆ど水を吸ってしまった綿とあまり水を吸っていない綿、どっちが  
より多く水を吸えるかってことさ」

「と言いますと？」

「俺のいたところにはこの国でも有名な孫子や三略等はもちろん、  
他にも多くの兵法書がある。それを教える時に、この国の兵法が得  
意だとこの国の考え方が邪魔して俺がいた国の兵法を思い付かない  
可能性がある。しかしこの国の考え方に染まりきってなく、ある程  
度の教養がある者なら両方の国の兵法を使いこなせると思ったんだ。  
何人が心当たりがあつて、その内の1人が元直殿だったというわけ  
だ」

「そうですか。では元直、どうしますか？」

「あの……本当に私なんかでいいんでしょうか？」

「ああ。というか元直殿がいいからここに来てるんだしな」

「（わ、私がいいって……）」

「ん、どうかしたか？顔が真っ赤だが」

「い、いえ、大丈夫です！ その話お受けします！ 私の真名は由<sup>ゆ</sup>里<sup>り</sup>です！」

「それは良かった。それと仲間になったんだから話しやすいように話していいぞ。名前も好きなように呼んでいいからな」

「はい！ 今から準備してきますね！」

「ああ。出発は二日後にする予定だからゆっくり準備するといい。では水鏡殿、二日後に由里を迎えに来ますよ」

「はい、わかりました。また後日お会いしましょう」

「はい、また後日に」

ふう、何とか目標はクリアつと。黄巾の乱はまだ始まったばかりだしこのまま順調にいけばうまく合流できるかな。

「おーい、零兄！」

「ん、霊麟か」

「どうだったんだ？」

「ああ、無事仲間になってもらえたよ」

「そっか。あ、そう言えばうまい店見つけたんだ。一緒に行こうぜ」

「いいぞ。案内してくれ」

そうして霊麟に付き合ったりしているうちに二日が経った。

「あ、零様！ あ、そちらの方は？」

「今度は様か。まあ自分で好きに呼んでくれって言ったんだししょうがないか」

「俺は姜維、真名は霊麟だ。零兄が好きに呼ばせてるから俺も真名を預けるよ。え」と……」

「私は徐庶、真名は由里です。私も真名を預けます。よろしくね、霊麟さん」

「ああ、こっちこそよろしくな、由里」

「じゃあ、行きますか。では縁があつたらまた会いましょう、水鏡殿」

「ええ、ご縁があれば」

さて、潁川に行く必要はないから次は河内か。

「さて、皆行くぞ！」

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

俺たちは今河内で人探しをしている。え、此处に来るまでの旅の内

容？ つまらなさ過ぎて語るまでもない。

「なあ、零兄。そろそろ何か食べようぜ」

「確かに腹が減ったな。休憩ついでに何か食べるか」

「ええ、そうしましょう」

「さすが、話がわかる！ そうときまればこっちだこっち！ さっき街の人においしい店の場所を聞いておいたんだ」

そうして霊麟について行くと人だかりができてるのが見えた。

「早く金と食い物を持ってこい！ 俺たちや黄巾党だぞ！」

「何だ？」

「あ、零兄。何か黄巾党が人質とって騒いでるみたいなんだよ」

霊麟と会話していると街の人が黄巾党の三人組と話した。

「食料と金を出せばその娘を開放するんだな？」

「あ？ そんなのするわけねえだろ！ こんな上玉なんだ、皆で回さねえともったいねえだろうが」

そう言って捕まえている男がその娘の胸を揉む。

「嫌ああ！」

「てめえは黙ってる！」

「ひっ！」

男は胸から手を離し静かにするよう命令する。

「あゝ、何かイライラしてきた」

正直言つて俺はこういう奴らに対してあまりキレずにはいられない。前世で幼馴染がそういう目にあいそうになったり、この大陸に来た時に弁や協がそういう目にあいそうになっていたからだろう。

「おい、あんたら。悪い事は言わねえからその娘を離せ」

「……その服、てめえ天の御遣いとか言う奴だな。状況が見えてねえのか？ こいつを殺してもいいんだぜ？」

「そうか、一応忠告はしたからな」

「は？ 何言つてんだてめえ」

黄巾党の男が言った刹那、俺は縮地でその男に近づき左手の指で刀身を挟み、右手で穹を抜刀し根元から刀身を断ち切つて、刀身を足元に捨て左手で顔面に拳を叩き込み、右側にいる男を蹴り飛ばす。

「てめえ！」

左側にいる男が俺を切ろうとしてくるが、再び穹で刀身を切り捨て、頭を掴み地面に叩きつけるように引っ張りながらそいつの顔面に膝を叩き込み投げ捨てる。

「だから言ったのに」

そう言いながら理解できないとばかりに首を振る。

「す、すげえ……」

誰かがそう言うのと皆称賛の言葉を贈り、拍手が沸き起こる。

「ん、何だ？」

衝撃が来たと思ったら何故か先程助けた娘に泣き付かれていた。よっぽど怖い思いをしたのだろう。だから……

「しょうがないか」

安心するまで頭を撫でてやることにした。

｝side end｝

｝人質の娘 side｝

「早く金と食い物を持ってこい！ 俺たちや黄巾党だぞ！」

うう、何でこんなことになったんだろう？ お昼ご飯を食べて今日のお夕飯のために買い物をして帰ろうと思ったときにいきなり後ろから捕まえられて……もう嫌。

「食料と金を出せばその娘を開放するんだな？」

も、もしかして私助かる？

「あ？ そんなのするわけねえだろ！　こんな上玉なんだ、皆で回さねえともつたいねえだろうが」

え、今何て……

「嫌ああ！」

黄巾党の男が言った言葉が理解できなくて呆然としていたらいきなり胸を触られた。そのことに驚いて私は大きく悲鳴の声を上げる。

「てめえは黙ってる！」

「ひっ！」

怖い。一言で言うとは軽く聞こえるけどそうとしか言えないほど怖い。そして先程の言葉をようやく理解することができた。私はこの人たちの慰み者にされるのだと。

「おい、あんたら。悪い事は言わねえからその娘を離せ」

そんな時、私の目の前に黒い服を着て両腰に見たこともない武器を持った男の人が現れた。

「……その服、てめえ天の御遣いとか言う奴だな。状況が見えてねえのか？　こいつを殺してもいいんだぜ？」

私はもうこの天の御遣いと呼ばれた人に関わって欲しくなかった。この人の言葉は黄巾党の人にとっては傲慢に聞こえていて、それに

怒っているのだろう。だから私に関わって欲しくなかった。怒ったせいで酷い事をされるのは私なのだから。

「そうか、一応忠告はしたからな」

「は？ 何言っただてめえ」

嫌なことだけど私も黄巾党の男と同じことを思った。だけどそう思ったその時には天の御遣いらしき人は目の前にいて、瞬く間に黄巾党を倒してしまった。

「……………」

その男の人が何を言ってるのか分からなかったが、私は気付けばその人に泣きついていた。するとその人は子供をあやすように私の頭を撫でてくれた。私はそれをただ温かいだけ思った。

side end

zero side

「落ち着いたか？」

落ち着いて座れるところでずっと泣きやむのを待っていた俺は、頃合いを見計らってそう話しかけた。

「……はい、もう平気です。ありがとうございます」

「いや、当然のことをしたまでだ」



「あの、何かお礼を……」

「そんなの必要無いよ」

「で、でも……」

「はあ、じゃあ一つ教えてほしい事があるんだけど」

「はい、何でしょうか？」

「この辺に司馬仲達殿がいると聞いたんだけど何処に住んでるか教えてくれる？」

「ふえ、私に何か御用ですか？」

まさかの本人！？

「零兄、仲達殿って？」

「ああ、俺がここに来た理由の人だ。えっと、俺は天伎零。一応天の御遣い兼双天將軍だ。こっちは俺の仲間の姜維と徐庶。用というのは仲達殿に仲間になって欲しいんだ。こっちは」

「私が仲間に……ですか？」

「ああ、そうだ。俺たちが漢王朝をたてなおすのに協力して欲しいんだよ」

「あの、もし私が仲間になったら何処に配属されるのでしょうか？」

「これは俺が個人的に集めてる仲間だからな。俺のところだ」

「なります！ 仲間になります！」

「お、おう、そうか。俺のことは好きに呼んでくれ」

「はい、零さん！ 私の真名は信乃しのです。皆さんにお預けします！」

「おう、よろしくな、信乃」

「俺は姜維、真名は霊麟だ。よろしく！」

「私は徐庶、真名は由里です。よろしくお願いしますね」

「こちらこそよろしく願います、霊麟さん、由里さん」

「えーっと、次は何処に向かうんだっけ？」

「河間の張コウの所だ。その後で東萊の太史慈の所に向かう。さて、そろそろ黄巾党の動きも活発化してきたし、俺自身も次の策を用意したいから急ごう。明日、明後日中には出発するぞ」

「分かりました。じゃあ急いで準備しますね」

「頼む。何かあったら大通りにある北門に一番近い宿に来てくれ」

「はい」

そして次の日、俺たちは次の目的地である河間に向かった。

- - - - -

「零さん、向こうで黒煙が上がっています!」

「分かった、急いで向かうぞ!」

｝side end｝

｝??? side｝

「はあ、はあ、はあ」

「大丈夫、桜?」

「ああ、平気だ。この程度の敵にアタシが負けると思っのかい、美<sup>み</sup>音<sup>お</sup>?」

まったく、一度手合わせしたんだから分かるだろうに。

「それは無いだろうけど多勢に無勢、このままだと疲れた所に一斉攻撃を受けてお終いだよ」

「確かにね。だけど、いい方法何かあるかい?」

「な、何だお前!」

ん、賊が何やら驚いてるみたいだけど何かあったのか?

「天の御遣い天伎零、義によって助太刀しよう!」

天の御遣いって今巷で話題になっている奴のことか？ まあ、援軍  
つてのはありがたいな。

＼side end＼

＼零 side＼

急いで村に向かうと遠くで二人の女の子が囲まれているのが見えた。

「霊麟、お前は由里と信乃を守れ！ 俺はあの二人を助けに行く」

「わかった！」

さて、少しばかり暴れますか！

「百鬼夜行・弐の太刀！」

「な、何だお前！」

「天の御遣い天伎零、義によって助太刀しよう！」

「天の御使いだと！？ やべえ、ずらかるぞ！」

「逃がすと思ってるのか？」

俺はもう一度百鬼夜行・弐の太刀を放ち、そこにいた賊たちを全滅  
させた。

「いや、助かったよ。ありがとう」

「いや、遠くから黒煙が上がっているのが見えたから賊かと思って来たただけだ。見た所他の所にいた奴らは逃げたみたいだな」

「そうだね。まあ、自己紹介と行こうじゃないの。私は太史慈、こっちが張コウだよ」

「紹介された張コウだ。宜しくな、天の御遣い殿」

「ッ！……そうか。俺は天伎零だ。好きなように呼んでくれ。余り会話の時に役職で呼ばれるのは好きじゃないんだ」

「分かったよ。で、零は何でこんなところにいるの？ てつきり都にいると思つてたんだけど」

「ああ、俺は今、一緒に漢を立て直す為の仲間を集めていてな。その為に各地を巡っていたという訳だ」

「へえ、じゃあこっちの方にはいい人はいた？」

「もともとこっちにはある二人を探して向かってたからな」

「ふん、その二人つてのは誰なんだい？」

「太史慈と張コウ、お前たちだよ」

「……へえ、アタシたちはそんなに有名じゃないと思つてたんだが？」

「まあ、俺にも色々情報源つてのがあるのさ。で、返答は？」

「そうだな、じゃあ私たちと勝負しない？ 武人としてはそっちの方が人となりは理解しやすいからね」

「いい考えだ。どうだ、受けるか？」

「零さーん！ ってあれどうしたんですか？」

「お、いい所に来たな。仲間も来たことだしその提案、受けようじゃないか」

「よし、ならこっちに来な」

- - - - -

「よし、なら私から行くよ！」

「いや、太史慈は弓なんだから二人同時でいいぞ」

「……舐めてるのか？」

「まさか。まあ、とりあえず掛かって来い」

「桜！」

「分かってる、美音！」

張コウが正面から双剣で連続して切りかかってくる。俺はそれをいなししていくが、危険を感じ飛び退くと鏃を潰された矢が俺の頭があ

った場所を通過していく。そこに張コウは双剣を振りかぶり間を詰めてくる。

「さて、終わらせるか」

俺は震脚を思い切り繰り出し地を揺らす。踏み込んでいた地面が揺れたことに驚いたのか、張コウの動きが一瞬止まってしまふ。そして俺は双剣の柄頭に穹と溟の柄頭を当てて弾き飛ばし、太史慈の方に投げ飛ばす。俺はすぐさま縮地を使って二人の後ろに回り込み頸に刀の峰を触れさせる。

「勝負ありだな」

「う、うん」

「そ、そのようだな」

俺は穹と溟を納刀し、張コウを立ち上がらせる。

「で、どうだった？」

「うん、私としては十分合格点かな。桜は？」

「アタシも別にいいと思うぞ」

「じゃあ、決まりだね。私の真名は美音。これからよろしくね、零」

「アタシは桜だ。よろしく頼む、零」

「ああ、よろしく美音、桜」

「俺は姜維、真名は零麟だ！」

「私は徐庶、真名は由里です！」

「私は司馬懿、真名は信乃。これからよろしくお願いしますね」

「零様、向こうの方に官軍を見つけました。旗は青の皇旗、桃色の朱旗。おそらく皇甫さんと、朱雋さんかと思われます」

「瑠璃と珊瑚か。ちょうどいい、合流するぞ」

「じゃあ、私と桜は荷物を持ってくるよ」

「ああ、なるべく早く頼む」

- - - - -

「おい、瑠璃、珊瑚！」

「零殿！ もうよろしいのですか？」

「ああ、目的は達せたからね。それより今は誰が都を守ってるんだ？」

「ああ、それなら董卓さんの所の呂布さんが守ってますよ」

「へえ、飛將軍がか」



「はい。それでそちらの方々は？」

「ああ、姜維に徐庶、司馬懿に太史慈と張コウだ」

その後、瑠璃たちはお互いに真名を交換し合い、連合の集結場所に向かった。

） s i d e   e n d （

## 第伍話 「仲間集め」(後書き)

第伍話終了しました。

今回で一氣に仲間集めを終了させました。少し急ぎすぎたかもしれませんが。

真名の由来は、由里は 里で考え、信乃は里見八犬伝から女性らしい名前を、桜と美音はふと頭に浮かんできたものです。

少しキャラが多くなってきたので、次回から零以外の台詞の前に名前を一文書くかもしれません。

今回出てきた技はこちらです。

・百鬼夜行・弐の太刀……百鬼夜行は以前説明したので省略。弐の太刀は斬る物を選択できる子供先生の出てくる話の神が鳴く流派の技術。

次回の更新をお待ちください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5667t/>

---

真・恋姫†無双 ～天から来れし者～

2011年10月9日00時33分発行